

はねだうしろやまむじょうどうこふんしゅたいぶしゅつどしりょういっかつ  
埴田後山無常堂古墳主体部出土資料一括

種別	小松市指定文化財 考古資料
指定年月日	平成30年12月28日
所在地	小松市埋蔵文化財センター

埴田後山無常堂古墳は、小松市埴田町の集落の東側にある低丘陵の突端（南端部）に立地する。昭和57年、土砂採取工事により発見された古墳である。

古墳は復元すれば23.5mの円墳と推定され、主体部（埋葬施設）が2つ発見された。第一主体部は木棺直葬で、第二主体部は横穴式木室である。第一主体部から、鏡・剣・玉の3種の他に、<sup>まびきしつきかぶと たんこう</sup>眉庇付冑、<sup>やじり</sup>短甲（よろい）、<sup>やじり</sup>鏃などの鉄製品が出土した。

銅鏡は<sup>しじゅうきょう</sup>四獣鏡で、文様をもつ古墳時代の鏡としては、本市で唯一の出土である。<sup>たてはぎいたびょうどめしき</sup>眉庇付冑は<sup>さんかくいたかわとじしき</sup>豎矧板鋸留式、<sup>さんかくいたかわとじしき</sup>短甲は<sup>さんかくいたかわとじしき</sup>三角板革綴式に分類される。短甲は破損していたが、保存処理の段階で欠失部を補い復元された。5世紀中頃の<sup>かつちゅう</sup>甲冑型式転換期にあたる重要資料で、本市で唯一の鏡・剣・玉を伴う副葬品群としても貴重である。

古墳時代の甲冑は、畿内においてヤマト王権の統制下の組織で製作し、各地へもたらされた可能性が高いとされ、本墳の<sup>ひそうしゃ</sup>被葬者もその勢力との密接な関係が想定できる。

隣接する本市最大の河田山古墳群よりも、優れた副葬品を持つ新興勢力が台頭したことを示し、能美地域の古墳時代中期の動向を知る上で学術的価値は極めて高い。

- (1) 眉庇付冑：甲冑の革綴手法が鋸留手法に変わるとともに、新しい様式の冑として出現したものの。出現時期は5世紀の前半代で、消滅は5世紀末頃といわれる。
- (2) 横穴式木室：北陸では南加賀地域に限られる古墳時代後期の特殊な埋蔵施設で、横穴式の墓室を木材と粘土で構築するもの。第一主体部とは異なる時期のものである。



①四獣鏡 ②剣 ③メノウ製勾玉 ④眉庇付冑 ⑤短甲 ⑥長頸鏃 ⑦刀子